

日本語の雑談における後置名詞の機能

—なぜ名詞を付け足すのか—

荻宿 紀子

1. はじめに

日本語はSOV言語であり、文末に述語を置くのが標準である¹⁾が、話し言葉においては「いいな、**これ**」「いいと思う、**わたし**」のように述語よりも後に文²⁾の要素を置くことがある。本稿では後置³⁾現象の中でも名詞を後置する発話を取り上げる。後置名詞には、発話内容の理解に必要なものと不要なものがある。特に後者について、なぜ内容理解に不要な名詞を付け足すのかを考察する。

2. 先行研究と本稿の立場

後置現象についての先行研究は大きく三つに分けられる。後置要素の伝達機能に着目した研究としては、久野(1978)、藤井(1991)、高見(1995)、江口(2000)、綿貫(2012)等が挙げられる。後置現象を統語的に分析した研究には鎌田(2014)、三原(2015)等がある。聞き手の反応に注目し韻律情報も含めた分析をした研究として、ザトラウスキー(2005)、郭・伝(2012)等が挙げられる。

本稿では後置要素の伝達機能に着目するため、藤井(1991)を概観する。藤井(1991)はまず逆転要素を省略可能性で分け、「話し手によって行われた語順の逆転が聞き手の認知の状態にどのように効果をもたらし、発話の理解を助けているの

か(68頁)」を検討している。逆転要素が省略不可能である場合、発話計画の失敗による「修正文」と、述部が語用論的に有標である「有標文」とがあり⁴⁾、修正文は「補足、置き換え、制限、拡大、修飾、言い換え」、有標文は「質問、質問に対する答え」の機能があるという。逆転要素が省略可能である場合、その文を「付加文⁵⁾」と呼び、「確認、強調」の機能があると述べている。

藤井(1991)で言及されている機能分類は、修正文と付加文は逆転要素の機能分類、有標文は述部に注目した文類型による分類となっている。藤井(1991)は詳細な機能分類をしているが、統一的な観点での分類にはなっていない。また藤井(1991)は一発話での説明が多く、先行発話との内容的関連性が見えにくい。

本稿では述部と後置要素の両面をふまえ、「後置要素」の機能に注目し、先行発話との関連性を考慮して分析する。述部が先行発話との関連性が高いか低いか、名詞が内容理解に必要なか不要か、という観点で【表1】のように分類した。内容理解に必要な名詞は「情報付加」としてさらに「必須要素⁶⁾の付加」「確認要素の付

【表1】後置発話の分類

	述部	名詞
①	低い	情報付加
②		
③	高い	確認要素の付加
④		談話展開上の付加
⑤	低い	

加」と分けた。内容理解に不要な名詞は「談話展開上の付加」とした。

2つの観点で分類すれば4分類となるが、先行発話との関連性が高い述部で、名詞が内容理解に必要な場合を②③とさらに二つに分類し5分類とした。これは用例から名詞の必要度に差が見られたためである。②「必須要素」である後置名詞は必要性が高く、③「確認要素」である後置名詞は②に比べて必要性が低い。その連続性を記述するために②③を分けて考えることとした。

3. 調査にあたって

3.1 調査資料

以下の資料の中の〔1親しい同性友人同士(男女)の雑談〕を用いて調査を行った⁷⁾。後置発話はくだけた雑談によく使われるためである⁸⁾。宇佐美まゆみ監修(2011)「BTSJによる日本語話し言葉コーパス(2011年版)」『人間の相互作用研究のための多言語会話コーパスの構築とその語用論的分析方法の開発』平成20-22年度科学研究費補助金基盤研究B(課題番号20320072)研究成果

3.2 調査対象

述語より後ろに置かれた「名詞」を調査対象とした。談話では名詞は助詞が付く場合と付かない場合があり、情報性による分析を行いやすいためである。ガ格、ヲ格、二格⁹⁾の「名詞のみ(助詞無し(Φで示す))」、「名詞+格助詞」、「名詞+係助詞ハ」を採集した¹⁰⁾。述部は肯定の平叙文で形容詞述語と動詞述語を対象とした。

3.3 用例数

【表2】の通り、後置名詞79例のうち、

【表2】前置・後置の各用例数

格	ガ格				ヲ格				二格				総計
	Φ	ガ	ハ	計	Φ	ヲ	ハ	計	Φ	ニ	ハ	計	
前置	175	165	64	404	127	44	15	186	44	124	4	172	762
後置	40	9	13	62	5	2	3	10	3	3	1	7	79
総計	215	174	77	466	132	46	18	196	47	127	5	179	841

ガ格が62例で約78%を占めている。前置名詞は762例のうち、ガ格が404例で約53%を占めている。前置名詞と比較しても後置名詞にはガ格が多い。ガ格、ヲ格、二格の中ではガ格が後置しやすい要素であるといえる¹¹⁾。

4. 述部の情報性

そもそも述部を前置する場合、話し手は述部に注目しており先に述べたいのである。その中でも、先行発話に関連しているため述部が前に置かれる場合と、先行発話には関連していないが述部が前に置かれる場合とがある。従って先行発話との関連性の高低により述部を分類した。用例末の○付数字は【表1】の分類番号を示す。

4.1 先行発話との関連性が高い述部

4.1.1 先行発話に同じ述語がある場合

先行発話に同じ述語があることにより、述部が前置するのが以下の例である。

[1] 298*F10 すごいくない?。○

299*F09= すごいね、それ。④

[2] 44*M03 おれ、「人名3」からプレゼントもらってないんだよ。○

45*M04 もらったけな、おれ。③

[1] は質問文と同じ動詞で答える例、[2] は相手と同じ動詞を用いる例である。

4.1.2 先行発話に同じ述語がない場合

先行発話に同じ述語はないが、述部に注目があるために述部が前置するのが次

の例である。

[3] 583*M05 名前は？。

584*M06 いや、言ったらまずいよ、それ。それ。[慌てたように] ④

[4] 85*M04 最近、なんか仲良くなってきた気がする。

86*M03 じゃ、書いてあげて。

87*M04 うん。

88*M04 なんか、打ち上げで「人名9」さんとすげー話したよ、それ。③

[5] 251*F11 だから、あー、それ聞いた瞬間、もう行くのやめようと思って。

252*F12 むっかつくねー、それ。④

[3] は質問の答えであり一番伝えたい部分である。[4] は85発話の「仲良くなってきた」という自分の発話内容を88発話で言い換えている。[5] は250発話までに態度の悪い店員の話をしており、252発話で先行発話に対する感想を述べている。感想は先行発話に直接関連がある事柄である。

4.2 先行発話との関連性が低い述部

先行発話との関連性が低い例には、述部が前置する発話から話題が始まる例と、話題が展開する例とがある。

[6] 24*F13 最近探してて、もうなんか、月末には出るからとか言って（うん）、

あ、結局決めたんだね。25*F14 そう。

26*F13 難しいな、これ。[話題のこと]

27*F14 これ、ね、難しいね。①

この資料では、録音の際に調査実施者が作成した「話題」が置いてあり、それを取り上げてよいことになっていた。[6] の「これ」はその話題の紙を指しており、26発話から話題が始まっている。25発話までは共通の知人が引越しをする話をしており、関連がない。

[7] 420*F08 “死ぬかもしれないから、みんな親孝行しといてね”とか。

421*F07 え、親孝行？<笑い>。

422*F08 うん、多分そう（<大きな笑い>）。

423*F08 多分そういう意味だと思うんだよね。

424*F07 ばかじゃないの<大きな笑い>。

425*F08 多分、“あなたの言いたいことはそういうこと？”って思ったけど。

426*F07 だめだよーね。

427*F08 うーん。428*F08 つらーいんだろうね、体が。①

[7] は420発話から「親孝行しといて」と言われたことについて話しているが、428発話から「体がつらい」という話にて展開している。

関連性が低いという分類にしたのは述部を前に置く根拠が先行発話にない用例であり、述部に注目が無いわけではない。

[6] [7] は感想をそのまま表出したため述部を前置し、後から名詞が置かれた例である。この場合も話し手は述部に重点を置いているために前置したといえる。

5. 名詞の情報性

次に【表1】の①～⑤の分類について名詞に注目して以下に示す。

5.1 情報付加

5.1.1 必須要素の付加

内容理解に必要な後置名詞は「情報付加」とした。そのうち必須要素の付加としたのは内容理解のために必要性が高い名詞である。①が先行発話との関連性が低い述部、②が高い述部である。

【表3】によると、助詞無しで名詞のみが後置した4例はすべて①の例であり、当該発話から話題がはじまる例である。

【表3】「情報付加(必須要素の付加)」の後置名詞

分類 述部		助詞の有無		一格			二格			計	
		Φ	ガ	ハ	ヲ	ハ	Φ	ニ	ニハ		
① 低い	人称詞	2						1		3	
	指示詞	2			1					3	
	普通名詞		5							5	
	固有名詞									0	
② 高い	人称詞	2						1		3	
	指示詞									0	
	普通名詞		1		1			1		3	
	固有名詞		1						1	2	
計		4	9	0	0	2	0	0	3	1	19

[8] 506*F05 このお題は、結構難しいね。
507*F06 うーん。508*F06 暑い、ここ。
509*F05 そっかー。510*F05 あーでも、
いいな、これ。511*F05 録音できるやつ、私も欲しい。①

[8] の「これ」は録音機を指していると考えられ、用例部分から話が始まっている。「これ」がなければ何について「いいな」と言っているのかわからないため、必須要素の付加であるといえる。前掲[6] も同様の例である。

次に助詞有りの例だが、【表3】を見ると19例中15例が名詞ガ、名詞ヲ、名詞ニ、名詞ニハの用例である。必須要素の付加は上述 [6] [8] のような例を除くと、ほとんどが格助詞が付く例である。

[9] 122-3*M19 トイレでわーって<軽く笑いながら>な~~って~~たんだけどー、おれが。②

[10] 198*F19 中国一、は、結構、歴史名所とか行くと、必ず、あるじゃん、石碑が。①

[11] 652*M13 それでーこの大学来てー、すげー似てると思って、ここ来たいと思ったからー。
653*M13 なん、似てるよ、外国に。②

[9] は飲み会の時の話だが、述部だけでは主体がわからない。[10] は書道の話をしているが「石碑」は198発話で初めて出てくる。[11] は653発話で初めて似

ている対象が「外国」であると示される。

[9]～[11] のような格助詞が付いた名詞は後置されていても、文の要素であることが意識されているといえる。内容理解に必要な文の要素が脱落してしまったために後置したと考えられ、必要が高いと判断した。「必須要素の付加」は述語を述べてから情報が足りないと感じ、補足のために名詞を付加した例である。

5.1.2 確認要素の付加

「情報付加」のうち、述部と先行発話との関連性が高く、名詞が①②「必須要素の付加」に比べて必要が高くないものを③「確認要素の付加」とした。

【表4】「情報付加(確認要素の付加)」の後置名詞

分類 述部/名詞		助詞の有無			一格			二格			計
		Φ	ガ	ハ	Φ	ヲ	ハ	Φ	ニ	ニハ	
③ 高い	人稱詞	9		6							15
	指示詞			1							1
	普通名詞	1						2			3
	固有名詞										4
	計	12	0	8	1	0	0	2	0	0	23

【表4】を見ると、23例のうち15例が助詞無しであり、助詞が無い例が多い。助詞が無い例は格助詞が付いた「必須要素の付加」の例よりも文の要素という意識は弱まっていると考えられる。

[12] 304*F01 <あの>{>}ね、しっかりしてる、しっかりしてるけど<軽い笑い>。

305*F02 すっごいフォローされてるな、あた□<若干笑い気味に>。

[この間、F01は笑っている] ③¹²⁾

[13] 818*M17】ていうか、準備遅すぎだよ、あいつら。819*M18 ね。

820*M17 慣れてないのもあるけど(<軽い笑い>)、すーごいかかってた(<軽い笑い>) もんね、準備。

[この笑いは、直後の発話と関係あり] ③

[12] はF02自身のイメージの話をしており、話の流れからは「しっかりしてる」

のがF02であることはわかる。しかし305発話の述語からだけでは主体がわからない。[13]も818発話で「準備」という語は使われているものの、820発話の「準備」がないと「かかったた」の対象がわかりにくい。[12][13]は後置名詞がなくても内容が全く理解できないわけではないが、付加した方が発話内容がわかりやすくなるということで「確認要素の付加」とした。

助詞が有る例はガ格で名詞+係助詞ハの例が8例である。

[14] 432*M04】<いい>{>}, いい加減<笑いながら>

433*M03 いい加減じゃないと思うんだよ、あれは。[この間、M04は笑っている]

434*M04 おれん中でかなりいい加減だ<笑いながら>。③

[14]は述語が「思う」であり、「おれは」がなくても主体は話し手であるとわかる。しかし、係助詞ハがついており、単に主体を示すのみならず、M04とは意見の相違があることを示している。後置名詞がなくても内容が理解できないわけではないが、付加した方が対比的な意味が伝わりやすくなるため、「確認要素の付加」とした。

5.2 談話展開上の付加

内容理解に不要な後置名詞は「談話展開上の付加」とした。④が先行発話と関連性が高い述部、⑤が低い述部である。

【表5】を見ると、内容理解に不要な名詞はすべて人称代名詞と指示代名詞であり、特に指示代名詞が多い。また、37例中29例が名詞に助詞を伴わない例である。以下は④の助詞が無い例である。

[15] 292*M13 <でしょ>{>}, 微妙でしょ?<笑いながら>。

【表5】「談話展開上の付加」の後置名詞

分類 述部/名詞	助詞の有無			方格			ヲ格			ニ格			計
	Φ	ガ	ハ	Φ	ヲ	ハ	Φ	ニ	ハ	Φ	ニ	ハ	
④ 高い	人稱詞		7										7
	指示詞	14		5	3		3	1					26
	普通名詞												0
	固有名詞												0
⑤ 低い	人稱詞	1											1
	指示詞	2			1								3
	普通名詞												0
	固有名詞												0
計	24	0	5	4	0	3	1	0	0	37			

293*M13 ここなんかすごい微妙だと思うんだ。(うん)あれ。④

[15]は述語が「思う」で、自称詞「おれ」がなくても話し手が主体だとわかるため、内容理解に不要であると判断した。

[16] 616*M18 あれ面白かったね。

[この間、M17は笑っている]

617*M18 すごかったもんね、あれ。

[この間、M17は笑っている]④

[17] 294*F05 だって、なんか、申し訳なさ過ぎてさ。

295*F06 うーん。 296*F06 いや、分かるよ、それ。④

[16]も[17]も後置した指示代名詞がなくても発話内容を理解することができる。

助詞が付いた例は全て④で、以下のような指示代名詞+ハの例である。

[18] 118*F01 やったら、かご3個分ぐらい<買ってんのね>{<}>。

["やったら"を強調して]

119*F02 <買おうぜ、買おうぜとかいって>{>}ね。120*F02 すごかったね、<あれは>{<}>。④

[19] 389*F06 通常が6時半起きだからー。390*F05 うんうんうんうん。391*F05 そっか。[ささやくように]392*F06 うん。

393*F05 えらいよねー。

394*F05 早いよー、それは。④

[18][19]は文脈指示の指示代名詞が

とで、話題を継続するということが確認されるということである。本稿の調査では質問文は対象外であるが、後置名詞の機能から考えると、本稿での「確認要素の付加」に当たる例である。

藤井(1991)では強調の例として「どこかのおじさんがやってたんだと思うんです、私。(77頁)」を挙げている。「思うんです」という述語から主体が「私」であることは明らかである。にもかかわらず、「私」を付加するのは強調するためであると説明されている。これは本稿の「談話展開上の付加」に当たる例である。

本稿の分類では内容理解に不要な後置名詞は多くが指示代名詞の用例であった。藤井(1991)では指示代名詞の例は挙げられていない。指示代名詞の後置の場合でも「確認」や「強調」で説明できるのだろうか。

[16] [17] [20] は指示代名詞は無くても述部の指示対象は明らかである。かつ、藤井(1991)の例とは異なり、質問文でもなく、付加しても指示する内容が明確になるわけでもない。藤井(1991)が述べている意味での「確認」の機能はない。

自称詞であれば、聞き手との意見の相違を明確にするために「強調」することはあり得る。後置した指示代名詞も強く発音すれば「強調」の機能を持たせることができなくはない。しかし、少なくとも [16] [17] [20] の例は、「強調」する必要はないように思われる。

成岡(2016)では指示詞を自然発話をデータとした相互行為の中でとらえ、指示詞が社会的文化的コンテクストを指標することを考察しており、「あれ」や「それ」を省略しても発話の命題内容に変化はな

く、指示的機能を持たない例として以下を挙げている。

[21] 4.J: あたしも買っちゃった: **あれ**.

5.K: かわいいよね: **あれ**.

6.J: うちの近くの郵便局並んでたよ: **あれ**で. (50-51 頁)

[22] 6.H: は?

7.: [どうということそれ]? (52 頁)

[23] 17.H: **それ**おかしくない? (52 頁)

成岡(2016)によると、[21] は似たような発話の構造の中で繰り返し同じ指示詞「あれ」を使うことで、対象への好意と共に、二者間の共感¹⁴⁾が表現されている。また、[22] [23] のようなソ系指示詞は相手と対立する意見や感情を表現する役割があり、「感情や態度の表出の機能」を果たしていると述べている。

成岡(2016)は指示詞を相互行為の中で見ていく必要があるという重要な指摘をしている。また、省略しても命題内容が変化しない「あれ」や「それ」があるという記述についても、本調査でも類例がみられ、談話における指示詞の実態を記述をするうえで必要な指摘であると考えられる。しかし、指示詞そのものの機能と、指示詞の使い方による機能とは分けて記述した方がよいのではないか。

[21] で対象への好意や共感を表しているのは「かわいいよね」「あたしも」などの部分である。「A: やだな、**あれ**。B: 面白いよ、**あれ**。(作例)」のように対象に否定的な発話、相手に共感しない文脈でも「あれ」は用いられるだろう。

また、[22] [23] の「それ」が相手との対立を表しているように見えるのは、取り上げた用例の文脈によるものである。本稿 [17] 「いや、分かるよ、**それ**。」のよ

うに、相手の話している内容に同意する発話にもソ系の指示詞は使われている。

「感情や態度の表出の機能」は基本的には指示詞の前後の文脈が担っていると考えられ、本稿では「あれ」や「それ」など、指示詞そのものの機能はやはり「指示」であると考えたい。

本稿で考察したいのは、相互行為によって成り立つ談話において、なぜ助詞が付かない指示代名詞が後置されるのか、その後置指示代名詞の機能は何か、という指示代名詞の使い方による機能である。

指示代名詞はもちろん、述語に前置することもある。しかし、前置されている場合、構文の意識があり文の要素として発話されているのに対し、後置されている場合は標準的な構文からは崩れた文となっており、文の要素という意識が弱まっているのではないかと考えられる。さらに、後置名詞が無助詞である場合、述語との関係がより希薄になる。発話内部における働きよりも談話における働きが強くなるのではないか。

談話を構築していくためには、話し手と聞き手が持つ情報の管理をしていく必要があり、ある情報を共有しているのかどうかを提示していく必要がある。本稿[16]「すごかったもんね、あれ。」の「あれ」はなくても発話内容を理解できる。しかし、話し手と聞き手とが共有している過去の出来事を示す「あれ」を付加することで情報共有の状態を提示している。本稿[17]「いや、分かるよ、それ。」の「それ」は使わなくても、「分かるよ」の対象が相手の発話内容だということは理解できる。しかし、相手の発話内容を「それ」と指し示して、会話を通して共有し

た情報を提示しながら進めている。

「あれ」でもともと共有していたものや、「それ」で聞き手の領域にあったが会話を通して共有したものを、対象がわかっていても提示することで、話し手と聞き手との共有情報の管理をしながら話を進めているといえるのではないだろうか。

7. おわりに

本稿では、名詞を後置する例に絞り、藤井(1991)を基に述部と名詞の両者から見て後置発話の分類の整理を行った。後置発話の述部は程度の差こそあれ話し手にとって重要な要素であるため前置される。後置名詞は内容理解に必要なものと不要なものがあり、必要な名詞は情報付加、不要な名詞は談話展開上の付加として機能している。談話展開上の付加の後置名詞には、助詞が付かない指示代名詞が多かったが、それらは話し手と聞き手の共有情報の管理のために付加される。

本稿では助詞の有無が情報性の一つの指標となることもあり、名詞に絞って後置発話を考察したが、今後は名詞以外の後置要素についても本稿での枠組みで整理できるのかどうか、考察したい。

また、韻律情報を含めた分析も必要である。荻宿(2018)の資料には後置された自称詞が弱く発音されている例があることを確認している。藤井(1991)が述べる「強調」以外にも後置要素の機能がある可能性がある。[16]の例では聞き手が笑っていて返答してくれないために後置要素を付加したということも考えられる。後置要素の前の「間」、聞き手の反応の有無についても考察していきたい。

参考文献

- 江口巧 (2000) 「日本語の後置文—情報提示の方略—」『言語文化論究』12 九州大学大学院言語文化研究所, 81-93 頁
- 小田勝 (2007) 「遊離語句の論」岐阜聖徳学園大学外国語学部 (編) 『異文化のクロスロード—文学・文化・言語』245-265 頁
- 尾上圭介 (1996) 「主語にハもガも使えない文について」日本認知科学会第13回大会ワークショップ資料
- 郭潔・伝康晴 (2012) 「日本語対話コーパスにおける倒置構文について：聞き手の反応に注目して」『第1回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』国立国語研究所, 283-288 頁
- 鎌田浩二 (2014) 「日本語後置構文と言語情報処理」『Sophia linguistica』61 上智大学国際言語情報研究所, 165-185 頁
- 荻宿紀子 (2014) 「談話における自称詞のいわゆる「無助詞」現象—言わなくてもわかるときに言う「わたし」の機能—」『表現研究』99, 40-49 頁
- 荻宿紀子 (2018) 「『大学生三者会話コーパス』の設計と調査方法」『表現学部紀要』18 和光大学表現学部
- 久野暲 (1978) 『談話の文法』大修館書店
- 黒崎佐仁子 (2003) 「無助詞文の分類と段階性」『早稲田大学日本語教育研究』2, 77-93 頁
- ザトラウスキー・ポリー (2005) 「情報処理、相互作用、談話構造からみた倒置と非言語行動との関係」串田秀也・定延利之・伝康晴 (編) 『活動としての文と発話』ひつじ書房, 159-208 頁
- 高見健一 (1995) 「日英語の後置文と情報構造」『日英語の右方移動構文—その

- 構造と機能—』ひつじ書房, 149-165 頁
- 成岡恵子 (2016) 「相互行為からみた指示詞と社会文化的コンテクスト」藤井洋子・高梨博子 (編) 『コミュニケーションのダイナミズム—自然発話データから』ひつじ書房, 39-62 頁
- 藤井洋子 (1991) 「日本語文における語順の逆転—談話語用論的視点からの分析—」『言語研究』99, 58-81 頁
- 藤井洋子 (1995) 「日本語の語順の逆転について—会話の中の情報の流れを中心に—」『日英語の右方移動構文—その構造と機能—』ひつじ書房, 167-198 頁
- 三原健一 (2015) 「地図製作計画における日本語の後置文」『日本語・日本文化研究』25 大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻, 1-11 頁
- 綿貫啓子 (2012) 「後置文の意味機能から探る話し言葉の生成のしくみ」『Scientific approaches to language』11 神田外語大学言語科学研究センター, 137-158 頁

注

- (1) 3.2に示した条件で用例を集めたところ、後置名詞は79例、前置名詞は762例、計841例であった。述語と名詞とがそろった発話において、後置名詞の出現率は約9%であり、やはり名詞は前置が標準であるといえる。
- (2) 本稿では母語話者が考える規範的な言葉の一まとまりを「文」と呼び、実際に会話に表出した言葉の一まとまりを「発話」と呼ぶが、先行研究の文、発話の用語は原典のまま用いる。
- (3) 話し言葉では話し手が意図的に文の要素を述語よりも後に置く例は少

- なく、書き言葉における修辭的な「倒置」とは異なる。後置発話の発生要因は話し手の注目が述部にあることである(4節)。述部前置発話ともいえるが、多数の先行研究が「後置」という用語を用いているため、本稿でも「後置」という用語を用いる。
- (4) 藤井(1991)によると修正文は逆転要素の方が述部より焦点が当たっており、有標文は述部の方が逆転要素より焦点が当たっている。
- (5) 藤井(1991)は「述部の部分が話し手の言いたいことであり、逆転要素は単に後から付け加えられたものである(76頁)」と述べている。
- (6) 本稿では統語的に「必須」という意味ではなく、命題内容を理解するために「必須」という意味で用いる。
- (7) 語彙的な関西方言が多い会話は対象外とした。用例中の下線、**囲み**はすべて本稿筆者による。紙幅の都合で一部改行をなくし、ライン番号は割愛した。書き起こし資料では分析に限界はあるが、筆者のもつ録音資料だけでは用例に限りがあるため、今回は書き起こし資料を用いた。
- (8) 他に現代日本語研究会(編)(1997)『女性のことば・職場編』(2002)『男性のことば・職場編』ひつじ書房、国立国語研究所(2004)『日本語話し言葉コーパス』[自由対話]、宇佐美(2011)の[14初対面同性同士雑談(男/女)]でも調査を行ったが、友人同士の雑談に後置発話が多く見られた。
- (9) 時の二格は動詞からの要求度の低い格であるため、「学会がある、12月に」のような例は対象外とした。
- (10) 名詞の種類は指示代名詞、人称代名詞、普通名詞、固有名詞とし、数量詞、再帰名詞、時詞、疑問詞、不定称代名詞は除外した。また修飾句のついた名詞は除外した。
- (11) 高見(1995)によると「日本語の基本語順はSOVであり、どの句にも強調ストレスを置かない場合、目的語O、つまり動詞の直前の要素が文の焦点となる。したがって、話し手は焦点が動詞直前にない場合、その要素に強調ストレスを置か、あるいはその要素を動詞の直前に置いて、その要素が焦点であることを構文的にマークする。そのため、後置要素は焦点以外の要素に限られる。(163～164頁)」
- (12) 同じ自称詞でも[9]は②、[12]は③、[15]は④に分類している。[9]は自称詞がなければ主体が不明で、しかも格助詞ガが付いており主体明示の意識が働いているといえる。[12]は先行発話から主体がわかるが付加され、[15]は述語だけで主体がわかるが付加されているという違いがある。
- (13) [19]「あれは」[20]「それは」は発話の場に有るものを指すわけではなく、[15]の「おれは」に比べると対比的な意味が弱い、「談話展開上の付加」とした。
- (14) 本稿では「共感」は発話内容に同意すること、「共有」は指示内容をお互いに理解していることとする。

付記：本稿は2017年12月2日に行われた早稲田大学国文学会にて発表した内容を加筆修正したものである。

(和光大学)